

**【旧約聖書日課】イザヤ書 7章10～14節**

10主は更にアハズに向かって言われた。11「主なるあなたの神に、しるしを求めよ。深く陰府の方に、あるいは高く天の方に。」

12しかし、アハズは言った。

「わたしは求めない。

主を試すようなことはしない。」

13イザヤは言った。

「ダビデの家よ聞け。

あなたたちは人間にもどかしい思いをさせるだけでは足りず

わたしの神にも、もどかしい思いをさせるのか。」

14それゆえ、わたしの主が御自らあなたたちにしるしを与えられる。

見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み

その名をインマヌエルと呼ぶ。

**【福音書日課】マタイによる福音書 1章18～23節**

18イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。19夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。20このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。

21マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」22このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

23「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。

その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。

## 四本目が灯ったならば…【こども説教のために】

アドヴェントの四本目のロウソクが灯りました。今週、教会は、御子ご降誕を祝うクリスマスを迎えます。今日はまだ「待降節」の日曜日ですが、慣例で「降誕祭主日礼拝」と称して、クリスマスを記念し祝うとしました。

今年は、春のイースターの祝いのときから、大勢が集まることが憚られてきました。クリスマスは、世界中の教会でもっとも人が大勢集まるときですが、今年はそうもいかないようです。クリスマス为例年通り迎えられようと早くから厳しい制限をする対策をしてきた国々でも、皆で集まってクリスマスを迎えることは難しい状況が続いているようです。

日本人が正月に家族親族で集まって過ごすことを大切にしているように、世界にはクリスマスを家族で集まって過ごすことを大切にしている人たちがたくさんいます。「リモート・クリスマス」をすればよいと考える人もあるかもしれませんが、わたしたちが今年あらためて気づかされたのは、オンラインでは決して経験できない、人が同じ場所と時間を共にすることで初めて共有できるものが少なくない、ということでしょう。

今年、大人の皆さんが例年楽しみにしている「クリスマス祝会」の愛餐会は中止にしましたが、「こどもクリスマス」は、今日の午後、行うこととしました。わたしたちは、こどもたちにはどうしてもクリスマスを教会に集まって共に迎えてもらいたい、と願ってきました。

こどもたちと共に迎えるクリスマスは、例年と変わらないものです。降誕劇（ページェント）の礼拝をして、クリスマスの物語を共に味わいます。歌やゲーム、茶菓で楽しいひと時を過ごします。もちろん、例年通りとはいかないので、やり方を変えたり、制限をつけた安全対策を考えてきました。けれども、こどもたちには、今年も変わらないクリスマスの祝いを経験してもらいたいと願っているのです。

「クリスマスおめでとうございます」と互いに挨拶をいたしましょう。今年も、クリスマスを迎えることができたのです。会堂に集まることができた者も、そうでない者も、クリスマスの挨拶を交わしましょう。

そうです、今年もクリスマスは、わたしたちのもとを訪れてくれたのです。教会だけでなく世界中に、クリスマスは今年も来ました。わたしたちの生活がどうであろうと、二千年以上前にユダヤの小さな村でクリスマスを始めてくださった神が、今年も、世界中の人々にクリスマスを備えてくださっているのです。すべての人がクリスマスを迎えられようとしてくださっています。神は、どうしてもわたしたち人間にクリスマスを迎えさせたい、すべての人をクリスマスに迎えたいと、願ってくださっているのです。

## クリスマスを迎える経験

今年も、教会から大勢の方にクリスマスの祝いの礼拝のご案内を差し上げました。お叱りを受けるかもしれない思いながらも、案内を差し上げずにはいられなかったのです。もちろん、それぞれの礼拝をインターネットでライブ配信することも書き添えました。会堂においてになられなくても、それぞれのご自宅に居ながら、オンラインで礼拝に参加してくださるだけでも大歓迎だからです。ただ、その場合には、わたしどものほうが参加して下さっている方を知ることができないという欠点があります。

「そのほうが、参加する身としては気が楽だ」という方もあるかもしれません。実際、オンラインではなくても、何百人も集まる大教会の礼拝に参加するほうが、大勢に紛れて気が楽だということはあります。牧師・司祭や信者同士のお互いの人間関係に煩わされずに、静かに祈り、神の御前に自分自身を見つめるということを願うならば、それも良いかもしれません。わたしも、平日デスクワークをしながら、世界中の教会や祈りの集まりで行われている礼拝・集会のライブ動画を流し続けて過ごすことがあります。仕事の手を休めた短い時間が、無駄なネットサーフィンに費やされるのではなく、祈りや讃美のときになるのです。

もちろん、理想は、わたしたち皆が一つの空間に共に集まり、同じときに同じ空気を分かち合いながら、祈り、讃美し、御言葉を聴き合うことです。クリスマスのときにこそ、わたしたちは、その理想ともいえる教会の時間を、今まで当たり前で過ごしてきたのです。

今、このように集まることができる者と集まることができない者とが分けられ、双方向とは必ずしも言えないオンラインでかろうじてクリスマスを共に迎えています。もしかすると、最初のクリスマスに似た状況だったのではないのでしょうか。

最初のクリスマスを迎えたのは、幼子イエスの両親となった母マリアとその夫ヨセフです。ヨセフには、夢で現れた天使が、クリスマスの訪れを告げました。マリアは天使と対話したことが伝えられていますが（ルカ1章）、ヨセフは、天使の告げることを一方通行で聞いたのです。それでも、ヨセフは、その天使の告げることを受けとめ、自分自身の考えを変えたのです。マリアとの間で閉ざそうとしていた関係を、続けることに、決心を変えたのです。それは、彼が「夢を見る」というただ一人でいるときに経験したことで起こった、生き方の変化、人生の大きな新しい選択でした。

わたしたちのクリスマスの原体験の中には、もしかすると、このヨセフと同じようなところがあったのではないのでしょうか。

## クリスマスから始まる「共に」

大勢で集まり、今までと変わらない祝いを共にし、楽しく喜びの時間を分かち合うことも、大切なことです。けれども、わたしたちは、そこに迎え入れられるまでは、一人だったのです。そうです、皆、一人であった者が、クリスマスを迎える経験を重ねて、共にいること、多くの者が共に集まることを喜びとするようにされてきたのです。

ヨセフとマリアも、クリスマスを迎え入れるまでは、それぞれ一人だったのです。ヨセフは、二人が一緒になる前に、すでに縁を切ることさえ考えていました。マリアが身ごもったことを表ざたにするのを望まなかったからです。それが、夢で天使の告げることを聞いて、ヨセフは決心を変えました。マリアとの関係を断つのではなく、彼女を妻として迎え入れ、互いの関係を前に進めることにしたのです。

それぞれ一人であったヨセフとマリアは、クリスマスの招きを通して、二人になりました。共にいる者同士となりました。そして、そこには、さらに三人目の共にいる者が、すでに加えられていました。マリアの胎の子です。「イエス」と名付けることになる、産まれてくる男の子です。

ヨセフが一人、夢の中で天使の告げることを聞くことがなかったならば、起こらなかったことです。天使の告げることを聞いても、それをうっかり聞き逃してしまったり、他人事と聞き流してしまっていたならば、やはり起こらなかったことでしょう。だからこそ、天使はヨセフに、夢で現れたのではないのでしょうか。ヨセフが一人になり、ただ自分の心を開くことだけにすべてを用いていたときに、彼は、天使の告げるクリスマスの訪れの知らせを、自分自身の決心を変える、人生を新たにす言葉として、心に留めることができたのでしょうか。

わたしたちにも、ひそかに縁を切ってしまうと心に決めてきてしまった人があるのではないのでしょうか。無意識のうちに縁を切ってしまった人があるのではないのでしょうか。それどころか、初めから縁を結ぼうともせずきた人が周囲に大勢いるのではないのでしょうか。そのわたしたちに、クリスマスの天使は、告げているのです、「恐れず、その人を迎え入れなさい」と。

ヨセフに夢で告げた天使は言うのです、「神が共にいてくださる」と。わたしたちのひそやかな決心を変えさせるために、神ご自身がわたしたちと共にいようとしてくださっているのだ、と。人と共にいることが決して上手ではない、人を選び好みしてしまうわたしたちが、目の前の一人と、周囲にすでにいる一人と、共にいることができるようになるために、神がまず、わたしたちと共にいてくださるのです。